参議院選挙で問う

私の視点

参議院選挙が７月11日投票で目前に迫った。鳩山政権崩壊の最大要因となった沖縄の米軍普天間基地問題について、沖縄県保険医協会の仲里尚実会長に寄稿してもらった。

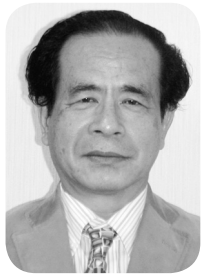
（大阪保険医新聞６月５日付から転載）

特別寄稿

戦後65年

沖縄のマグマは噴出寸前！

普天間基地は無条件撤去しかない



沖縄県保険医協会会長
仲里　尚実

9万3千人余が集まった4月25日の沖縄県民大会

沖縄の苦しみを一顧もせぬ本土の大メディア

この原稿を叩いているときに〝鳩山首相辞任〟のニュースが飛び込んできた。

会見での辞任の理由は、「政治とお金の問題」「普天間問題で社民党を政権離脱に追い込んだこと」であった。普天間基地を「最低でも県外」に移すことができなかったからではない。

彼は「沖縄県民の負担を軽減させる。最後は私が決断する」と言い続けてきた。多くの全国紙は首相が「優柔不断である」とか「米国との約束は重い」「同盟の信頼関係が大事」とかと論評し批判してきた。読売社説にいたっては「辺野古が最善だ」とし、「国の安全保障を、首長選挙結果に委ねるのが間違い」「首相が『沖縄の民意』を重視する発言をくり返し沖縄の期待が過剰に高まった」「移設先が見つからなければ普天間の深刻な状況が長期に固定化する。それを望むのか」…云々。

私は一読し、恫喝もどきの社説に絶句したものだ。いったいどこの国の新聞なのだろうか？　過重な基地負担にあえぐ沖縄県民の苦しみは一顧もされない。「本土も基地を共有すべきだ」の視点もない。

テレビの政治番組で〝米国との信頼関係云々…〟ばかりあげつらい、沖縄県民の65年間の重荷と苦悩には思いをはせることのできない東京の政治評論家どもの放言を聞きながら「鳩山首相、ガンバレ！　最後はお前が決めるのだ」とかすかな望みを託した県民は決して少なくなかった。

ところがどうだ〝辺野古沖くい打ち案〟!?　思わず〝オットットット～！〟とずっこけたのは私だけではあるまい。そしてとどめは、5月28日の辺野古移設を明記した日米共同声明。

65年間の重荷と苦悩

国際法に反し、土地強奪でつくった基地

私は普天間高校を1966（昭和41）年に卒業した。当時はもちろん米国の占領下（日本復帰は1972年）で、米軍人の犯罪は日常茶飯事であり、よっぽど大事件でなければ大きな新聞記事にはならなかった。高校の隣には小学校があったが、一日に数回はヘリ等の騒音で授業が聴取不能になっていた。深夜だってジェット機の爆音が突然激しく耳をつんざき、祖母と二人で住んでいたトタン屋根の粗末な家はその度に共鳴して振るえた。

当時の国費留学生として本土の大学の医学部に入学し、街中に有刺鉄線の金網がまったく見当たらないので「日本はいい国だな～」と素直に感動したものである。

沖縄県中部、人口9万人の宜野湾市のど真ん中に普天間基地がある。市民はドーナツ状に基地を取り囲むようにして生活している。基地には兵員約3000人とCH46中型ヘリ、CH53大型ヘリKC130空中給油機など52機が常駐し、FA18戦闘機も頻繁に飛来する。本土の米軍基地では守られている〝騒音協定〟など、沖縄ではあっても守られない。夜11時まで離発着する爆音が闇夜に広がりおおう。

この基地は、米軍が占領時に強制的に住民を収容所に囲い込んでいる間に土地を強奪し建設したものであり、国際人道法・ハーグ陸戦条約に違反している。この事実を多くの日本人は知らない。

1995年、米兵による少女暴行事件を期に、沖縄で反基地運動が激しく盛り上がった。怒りの県民世論に押され当時の橋本内閣で1996年、普天間基地返還が合意された。ところがこの時「移設条件付き」が持ち込まれ、移設先に名護市東海岸の辺野古が選定されたのである。

それに対して真っ先に地元のオジー、オバーたちが立ち上がった。基地の県内たらい回しを許さない闘いは瞬く間に沖縄全体に広がり、本土の個人・団体の支援者たちも間断なく辺野古に駆けつけた。そして現在まで13年にわたって基地建設を阻止してきた。

しかし、地元名護では悲しい現実も進行した。市民が誘致派と反対派に分れ争った。特に辺野古の周辺では田舎の豊かな助け合い共同体が崩壊させられたのである。特別に産業というものもない本島北部の田舎の町に、基地建設と引き換えに年間何百億もの大金が地元振興策としてばら撒かれることになり、大金をつかみ貧しさから逃れることができると考えたのも無理はない。いつの時代でもどこにでも起こってきたことだ。札束でほっぺたを殴り、無理を通す側こそが糾弾されるべきなのだ。

民家が建ち並ぶ普天間基地周辺
（宜野湾市ホームページより）

「抑止力」という呪縛にとらわれる異常

海兵隊は日本の平和と安全のための「抑止力」として必要であるという幻想と、移設先を探さなければならないという「呪縛」にとらわれている限り袋小路、泥沼にはまり込む。海兵隊は平和のための抑止力ではなく、事実は「戦争のための侵略部隊」「海外遠征部隊」であり続けた。

沖縄の海兵隊はベトナム戦争からイラク戦争、アフガン戦争まで、常に紛争の先陣を切る部隊であった。さらに言えば自らの国を守るとされる自衛隊が十数万人もいて、米海軍と空軍が居座っているのに、わずか何千人の海兵隊が「抑止力で日本を守る」とする感覚が異常なのである。

1960年1月に現行日米安保条約が調印されてから半世紀…1972年の施政権返還をはさんで、米軍基地がある故の苦しみと犠牲を沖縄県民は戦後65年も強いられてきた。これだけの長期にわたって外国の軍隊が居座り続けると言う異常さに気づいて欲しい。世界は変化し国と国の戦争から、国内戦・局地戦と紛争の形も変わってきた。〝敵地に真っ先に兵隊が殴りこむ〟海兵隊の「抑止力」とは、いったいどこの国の何の脅威を抑止するのであろうか。非同盟・非軍事が世界の流れであり、平和憲法をもつ日本が先頭に立ってつくるべき流れである。

内閣崩壊と沖縄に生まれた希望

日本国の0・6％の面積に75％の米軍専用基地。これはもう立派な中央政府による〝沖縄差別〟である。廃藩置県後の琉球・沖縄は皇民化教育の中で標準語励行が強要されたのはいいとして、沖縄の言葉・方言が〝悪〟として罰せられた。

大戦中は本土防衛の捨て石として利用され、最大の悲劇が県民を襲った。戦後はトカゲのしっぽ切りのごとく処理され、27年間も米国の支配下に置かれた。沖縄県民と全国の民主勢力の闘いが結びつき日本復帰を勝ち取ったが、米軍基地の過重負担はそのまま据え置かれたままだ。

鳩山首相の最大の功労は沖縄県民に「無条件に普天間基地を撤去せよ」の世論をつくり上げたことである。最初の彼の言葉で現実的な〝希望〟が生まれ、彼の行動で〝失望〟させられたが、誰も〝絶望〟はしていない。戦いと世論こそが〝展望〟を掴むことができることを学んだ。沖縄県民は自分の不条理な苦しみを日本のどこかに押し付けようとは思わない。ただ本土同胞の〝沖縄の基地問題への無関心〟を憂えるだけだ。

沖縄のマグマは噴出寸前である。

（2010年6月2日）